

『メノン』篇における想起（アナムネーシス）の論理

『メノン』篇での幾何学的証明の解釈について

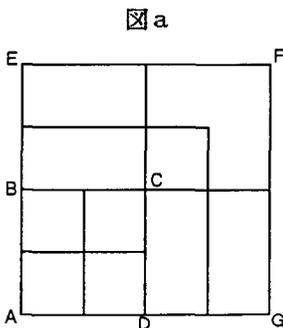
上田 徹

『メノン』篇のなかでも、ソクラテスが問答によって召使いの子に幾何学的証明を行わせる場面はよく知られている。この箇所は想起説とイデア論を、もっとも分かりやすく例示したものとして、古来から読まれてきた。しかし、この実例は想起の対象となる知識が数学などのアプリオリな知識に限定されるかのような観を容易に与えた点で、誤解の多い例でもあった。プラトンが想起説によって提示しようとした知識の領域は、善や美そのものをはじめとする、はるかに広汎なものであった。それゆえプラトンはそれらの知識に到達する方法として『国家』篇第七巻で問答法を示し、それと数学の論証とを峻別しているのである。すなわちプラトンの問答法はたんに数学的な知識に還元されるものではない。我々は想起をアプリオリな知識に限定する解釈を批判し、それを手掛かりにしながら想起説によってプラトンが意図していた論理を明らかにしたい。

I ソクラテスによる実験

我々は、まずソクラテスによる召使いの子に対する実験の内容をみることにしよう。ソクラテスは、想起説を実例を通じてメノンに明らかにするために、幾何学の知識をもたないメノンの召使いに順次質問をし、それに答えさせることによって、一辺二プゥスの正方形の面積の二倍の面積（八平方プゥス）をもつ正方形の一辺の長さを求めさせる。この実験は、召使いの子のおちいったアポリアーを挟んで、二つの段階から成り立っていると考えられる。我々はこの実験を前半と後半に区分し、実験(1)、実験(2)としたい。

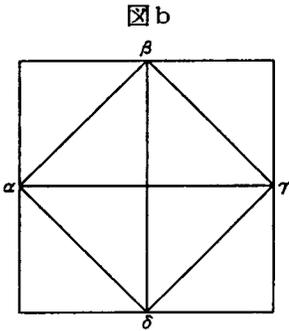
A. 実験(1)の内容



ソクラテスは一辺二プゥスの正方形 ABCD を描き、その面積が四平方プゥスであることを召使いの子から導き出す。そのち彼は召使いの子に、八平方プゥスの面積の正方形の一辺は何プゥスになるかをたずねる。召使いの子は、それが二プゥスの二倍の四プゥスであるという誤った推論をおこなう。ソクラテスは、一辺四プゥスの正方形 AEGF を描いて見せ、その面積は ABCD の四倍である十六平方プゥスになってしまうことを示す。召使いの子は、八平方プゥスの正方形の一辺はこれよりも短くなければならないことに気づき、

一辺三プゥスとするが、この正方形は九平方プゥスとなる。ここで召使いの子はアポリアーにおちいり、どの線が八平方プゥスの正方形の一辺に当たるものか指し示すこともできない（図 a 参照）。

B. 実験 (2) の内容



ソクラテスは、四平方プゥスの四つの正方形からなる、全体で十六平方プゥスになる正方形を新しい図形として描く。はじめ、召使いの子はなかに描かれた正方形 $\alpha\beta\gamma\delta$ の面積が八平方プゥスになることに気づかないが、四平方プゥスの正方形の半分が四つ集まって $\alpha\beta\gamma\delta$ を構成していることを発見し、 $\alpha\beta\gamma\delta$ の一辺は四平方プゥスの正方形の対角辺の長さに等しいことを答える（図 b 参照）。

II 想起説とソクラテスの実験との関係

ソクラテスの実験は、想起説の説明として出されたものである。この実験の内容は想起説といかなる関係にあるのだろうか。我々はまず想起説の内容を見てみよう。ソクラテスが 81B-E で語る想起説の内容は以下のようにまとめることができるだろう。

- ①魂は生前において一切のものを見てきているのであるから、魂が学んでしまっていないようなものは存在しない。
- ②事物の本性というものはすべて互いに親近なつながりをもっている。
- ③あるひとつのことを想起したことがきっかけとなっておのずとほかのすべてを発見するということがありうる。
- ④探求するとか学ぶといったことは想起するということである。

プラトンは、ここでミュートスを使いながら、想起説を一度獲得した知識の対象の再発見、再認のモデルによって説明している。そしてこのとき、ここでふれられている、その「対象」の性格とはいったい何かという疑問が生じる。ひとはここに、イデア的对象がプラトンによって想定されていると考えるかもしれない。それも自然であろう。しかし、それとは反対に、プラトンが想起説の実例とした召使いの子による実験は、かならずしもそのようなイデア的对象を想定しなくとも解釈できる内容をもっていると考えられるだろう。

つまり、ソクラテスが召使いの子に試みた実験は、普通の意味での幾何学的証明であり、ユークリッド幾何学の枠内で幾何学におけるアプリオリな命題の証明を行なったのだと考えるのである。この解釈によると、『メノン』篇のなかで想起説導入の直接の動機となったメノンによる「探求のパラドクス」の意味は、「何であるか」をあらかじめ経験的に知

っていないものはたずね求めることもできないという、経験的知識獲得のモデルにつきまとう再認のパラドクスであるとみなされる。そしてプラトンは、その問題点に対して、想起説を提起し、経験的な知識に対してアприオリな知識を対比し、その知識は誰にでも「先天的に」備わっておりそれを理解する能力もあるということを示し、パラドクスを解決したととることができるのである。⁽¹⁾

この解釈はおそらく、イデア界を経験界から「離在したもの」ととらえるプラトン解釈に助けられ、ながらく支持されてきた解釈であろう。しかし、この実験がたんにアприオリな知識の存在を主張しているものと考えれば、以下に挙げるような疑問がたちまち生ずるのである。すなわち、

疑問1. ソクラテスがパラドクスの解決として示すべきであったのは、誰もがアприオリな知識を行使できるということでも十分だったのであり、プラトンが想起説によって、一度目にした知識の再認のモデルを付け加えたのは余計であったのではないか。⁽²⁾

疑問2. 実験(1)、(2)は初期対話篇で見られた「知っているという臆断→無知の知→正しい思いなし」という段階的な過程に沿っているが、ソクラテスがただアприオリな知識の適用可能ということを実証しなかったのであれば、このような段階を踏む必要はなく、例えば「与えられた正方形の面積を四倍にせよ」といったもっと単純な事例を取り上げてよかったのではないか。それだけでも規則の発見、一般化ということは十分に示しうる。⁽³⁾

疑問3. 上の二つの疑問の根には、数学におけるプラトニズムへのラディカルな批判がある。つまり、召使いの子がアポリアーにおちいり、そこから救済されたことは、幾何学的証明のもつ論理的必然性には関係がない。そこで、規則を正しく適用しているかという点に限ってみれば、実験(1)でのソクラテスは、召使いの子に通約数の演算を行なわせており、召使いの子に、その規則の適用によって八平方ポットの正方形の面積が求められるかのような錯覚を抱かせているともみえる。ソクラテスは質問をするだけといいながら、実際は召使いの子を巧みな罠にはめており、無知の知のあとの正答への到達というソクラテスの描いた筋書きに召使いの子を従わせているに過ぎないのではないか。⁽⁴⁾ さらに、より重大な誤りは、実験が終わったのち、ソクラテスが、求められた正答は正しい思いなしに過ぎず、知識ではないといっていることである(85C)。このことにも同様に、幾何学的証明の論証過程という点からいえば、召使いの子はアприオリな知識を行使できており、その他に想起されるべきイデア的対象をソクラテスが考えるのは無意味であるという批判が可能ではないのか。

以上の疑問点は、想起をアприオリな知識の適用可能性と考えた場合に、召使いの子が正答に到達する過程と知識を持った幾何学者が正答に到達する過程は、外から見た論理的必然性という点からは同一であるにもかかわらず、ソクラテスは、前者は知識ではなく正

しい思いなしをもつものでしかないとはっきりといていることが問題となっている。このような疑問は、全く無意味であろうか。いや、我々は、この問題点は、のちに「ラリサへの道」の比喩としてソクラテス自身によって展開され、メノンに語られていると見るべきであろう。ソクラテスはその比喩のなかで、ラリサへの道をたどるものは、知識を持つものも、正しい思いなしをもつに過ぎないものも同じ道をたどる、つまり、実際上の振る舞いにおいては同一であると語っている。そして、知識と正しい思いなしは明らかに異なっているものであるにもかかわらず、その「有益さ」においては同一であると結論しているのである⁽⁵⁾(97A-C)。

従って、我々がその比喩を幾何学的論証に適用した場合、想起説のなかで語られている知識の「再認」のモデルがなんらかの意味を持つとすれば、それは、いったいどのような意味で有効性をもつことができるのであろうか。我々は、正しい思いなしの上位に、さらに想起の対象となるべき、なんらかの数学的対象を想定するべきであろうか。そしてそれは、「アプリアリのアプリアリ」としてさらに高次の対象を構成するのであろうか。

いままでにソクラテスの実験を「経験的な知識からアプリアリな知識への移行」を示す実例として解釈した諸家は、召使いの子が到達した正答は正しい思いなしに過ぎないというソクラテスの言葉について、一様に苦しい説明を与えている。例えば、ロス⁽⁶⁾は、この難点を、ソクラテスの実験は全体として「経験的なもの」でしかない、と考えることで解消しようとしている。すなわち、ソクラテスは砂の上に図形を描き、その具象的なイメージを使って召使いの子を導いたのであるから、到達した答は正しいにせよ、プラトンが本来の知識の対象と考えていた「論理的对象」からは一段劣る、と考えるのである。また、M. S. ブラウンは、プラトンが召使いの子の論証過程を全体として「思いなし」としたのは、実験(1)、(2)の問いの形式の違いのためであるという。ソクラテスが知識に応じるものとして問う問いの形式は、ti estin (何であるか)であり、『メノン』篇では、この問いの答えが与えられてこそ poion estin (どのようであるか)の問いは有意味であるといわれている。ブラウンによると、実験(1)では「算術的」に ti estin という問いかけで問答が進んでいるが、実験(2)では、ソクラテスは ti の問いを断念し、poion という問いによって、具象的な図形を用い、感覚に頼って答えを求めている、という。よって、到達された正答が知識ではなく「思いなし」とされるのは、実験(2)がプラトンの理想とした幾何学(論証的幾何学)に程遠い、感覚に依拠した幾何学だから、と彼は考えるのである⁽⁷⁾。

以上に見たロスとブラウンは、ともに、知識への「想起」を、感覚的对象から論理的对象への移行としてとらえているといえるだろう。そして、そのときの論理的对象とは、演算の直観的理解、推論の遂行など含んだゆるい意味のものであろう。

しかし、他方、ロスとブラウンのように、実験をなんらかの意味で「経験的」とみなす解釈は妥当ではないと考えることも可能である。なぜなら、ソクラテスは、召使いの子による答えの導出を、その過程においては明らかに完遂されたものと見なしている⁽⁸⁾。そればかりではなく、すでにみたように、実験の後に語られるラリサへの道の比喩がこの実験を

考慮にいれて語られているとすれば、その実際上の振る舞いは知識の遂行に比べて遜色の
あるものであってはならないのである。

また、ブラウンの説は、その他の点でも不十分である。ブラウンは、poion の問いに対応する経験的幾何学とは異なる論証的幾何学として、こののちテアイテトスらによって整備されることになる無理数論を予想している。しかし、この実験では、ソクラテスとメノンは、明らかに自分たちは正しい答えを知っているものであるという前提で対話をしており、『メノン』篇執筆当時のプラトンが、たとえ高次の無理数論についてなんらかのことを知っていたにせよ、想起説を具体的に示すための実験のなかで そのような理論を「正答」として両者に想定させているとは考えられないのである。⁽⁹⁾

そこで、ソクラテスとメノンの両者によって想定されている「知識」は、もちろん感覚的なものではなく、かつ、実験全体としてもアプリアリな知識の行使として遜色ないものという前提に立てば、どのような解釈が可能であろうか。ヴラストスとモラフチクはこの前提に立って実験の解釈をおこない、この「知識」とは、無理数に限らず当時の幾何学における真なる命題の集積からなる体系的知識であり、それをプラトンは高次の論理的対象として想起説のなかで語っているのだと考えている。我々はまずヴラストスの解釈から見ていくことにしよう。

ヴラストスは、ブラウンが実験(1)を特徴づけた「算術的」という問答の性格は実験(2)にも同様に当てはまるとし、両方の段階を通じてプラトンの強調点は算術的推論のもつアプリアリ性にあったと見ている。それではなぜ、実験ののち、召使いの子は思いなしをもっているに過ぎないといわれているのであろうか。ヴラストスは、この各段階での推論は正しい思いなしに過ぎないが、これらの推論が体系性を持ったとき、高次の論理的対象を構成すると考えている。従って、彼は、召使いの子は正しい推論を行なっているが、この体系性を欠いているため、正しい思いなしをもつものでしかないとされていると主張するのである。

ヴラストスの解釈は、実験そのものがアプリアリ／アポステリオリの部分的区別を持っていると考えていない。その点、ソクラテスのほかの発言に適合するが、他方、想起によってえられる知識の特徴である「再認」のモデルをなぜプラトンがここで用いているのかを彼は説明しない。彼は「想起とは論理的関係性の認知から結果する我々の知識の拡張のすべてである」といい、「知識へ到達する」ということは、概念の論理的関係について洞察を得ることであり、すなわち概念が分析的に結合されていることを発見することにほかならないと考えている。⁽¹⁰⁾つまり、想起を体系的・演繹的知識ととらえた点で、彼は思いなしから知識への移行を連続的にしてしまい、再認のモデルでとらえられているプラトンの想起説の意図は、プラトンのコスモロジーを語るミュートス的なものでしかないことになっているのである。また、ヴラストスの解釈は、彼が数学におけるプラトニズムの排除を志向しているため、召使いの子をアポリアーにおちいらせる必然性を説明しにくいのも事実である。⁽¹²⁾この点を補うため、モラフチクはヴラストスと大枠においては同様の解釈をと

りながら、「想起の実質的内容」として、体系的知識内部での「理解」ということを添えている。しかし、なぜ再認のモデルが使われているのかという点においてはヴラストと同じく、アプリオリな知識の獲得という説明をでておらず、不十分である。⁽¹³⁾

Ⅲ 探求のパラドクス

諸家が実験の解釈に苦しむのは、想起説の導入のきっかけとなった探求のパラドクスを経験的知識を獲得するさいのモデルでとらえてしまい、それゆえ、その解決としての幾何学的証明のなかに、アプリオリ/アポストオリの二分法をもちこんでいるからである。探求のパラドクスの詳細な解釈については別稿ですでに論じたが、⁽¹⁴⁾必要な範囲でそれにふれることにしたい。

探求のパラドクスとは、対話篇前半部で、ソクラテスの「徳とは何であるか」という問いに追い詰められ、自分の無知を認めざるを得なくなったメノンが、それ以上の追求をかわそうとしてソクラテスに突きつけた探求に関わるパラドクスである。メノンはソクラテスに次のように語る(80D5-8)。

M1…あなたが知らないもののなかで、どのようなものをあらかじめ目標として立てたうえであなたは探求するのですか。

M2…たとえ幸運にもそれに遭遇したにしてもどうしてそれだとわかるのでしょうか。それをあなたは知らなかったのだから。

メノンが語っているのは、一見、ひとは探求の対象をあらかじめ知っていなければ、探求をすることはできないという内容であるようにとれるが、その裏側には、もっと徹底した争論術の論理が隠されている。というのも、ソクラテスは、メノンのパラドクスを言い換えたものとして、つぎのように述べているからである(80E2-5)。

S1…人は誰でも知っていることを探求することはできない。なぜなら知っているものもはや探求する必要はないからである。

S2…他方知らないものを探求することもできない。なぜならこの場合、何を探求するべきかということすら知らないのであるから。

以上の両者のパラドクスが、事実上同じ意図をもって語られたとすると、ソクラテスのパラドクスが、メノンのその隠された意図を明らかにするために語られたことが分かるであろう。メノンのパラドクスは、一見、経験的知識の獲得のモデルで *ti estin* の探求の矛盾をソクラテスに指摘しているように見える。それは、つまり、経験的対象が与えられていないものは、そもそも探求できないという主張である。しかし、ソクラテスは、このメノンの主張は、経験的知識だけに限られた矛盾を露呈させているのではなく、実際は、知識と無知識の二分法のうえに立脚して知者と無知者を独断的に区別する争論術の論理に基づいていることを見抜いている。メノンは、まさしく、その論理を経験的知識獲得のモデルを借りて示したに過ぎない。そのため、ソクラテスはそのことを彼の言い換えのなか

で明示しているのである。この論理のうえでは、無知の対象を求めるといふ探求の論理は成立しない。すなわち、このパラドクスは、知識一般にひそむ二分法の危険を指摘しているのである。とすれば、プラトンは、このパラドクスの解決として想起説を与えることによって、本当はいかなることを意味していたのであろうか。

プラトンは、一般的に探求者が、その対象について完全な知識を現に所有していない「知らない」対象について探求を行うのであっても、その対象を探求者自身の真なる言論によって規定しようとする探求の可能性と確実性を保証する説として想起説を述べている。そして、その場合、探求の対象が経験的なものか否かは本質的な問題ではない。

メノンは「何であるか」というソクラテスの要求に従い、自ら真とする言論を提示したが、それらをことごとくソクラテスに覆され、「知らない」という自覚を余儀なくされた。しかし、そのことを認めたくえて、さらに、メノンはソクラテスの要求、すなわち「何であるか」を真なる言論によって規定することを試みなければならない。メノンはそれが不可能であると信じ、パラドクスで見られる知識と不知識の二分法へ回避しようとしたが、ここで、プラトンは想起説を提起し、「知らない」ということ自体が正しい思いなしとされる根拠を与えたのである。

想起説によれば、探求の対象の知識は、魂がすでにこの生以前の生において学んでしまっているものとされている。しかし、その内容は「何であるか」の問いを、言論によってこの生において追求しなければならないというソクラテスの対話的要請からの必然的な帰結である。つまり、探求者が探求の途上でその対象について「知らない」と自覚したとしても、探求者は自分の思いなしを直ちに知識であると固執することなく、一方で自分の無知を認めながら、さらにソクラテスの要請に従わなければならない。なぜなら、ソクラテスの要請が語っているのは「何であるか」の問いに答える縁は自分のもつ思いなし以外にはないということだからである。プラトンが想起説で指摘しようとするのは、この探求の可能性なのである。従って、想起によって探求される対象はすべて経験的なものではない、ということはそもそもまとはずれであろう。仮に、その対象が経験的に把握されうるものであっても、その現に知らないものを言論によって規定する探求は可能なのである。

諸家は、パラドクスを経験的知識だけに関わるものとみて、ソクラテスの実験の解釈のなかに、アプリアリ/アポストリアリの二分法を持ちこんでしまった。それゆえ、彼らは、想起説がそもそもそのような二分法を前提していないことに気づかず、想起の対象をアプリアリな命題に限定する結果になったのである。想起説は、探求の途上において探求者が自分の無知を自覚したとしても、ソクラテスの対話的要請が依然として有効であることを示し、「無知」そのものもまた探求の対象を指し示す一種の「正しい思いなし」であると告げている⁽¹⁵⁾。そして、そこに思いなしから知識への「想起の前進」があるゆえに、あらかじめ知ってたものを知るという再認のモデルが有効性を得るのである。この点はヴラストス、モラフチクの解釈では説明が困難であろう⁽¹⁶⁾。

IV 実験(1)、(2)の再解釈

諸家が実験のなかで、算術的か幾何学的かという区別にこだわるのは、想起されるアポリオリアナ知識をアイデアの対象性と類比的にとらえ、そこから知識と思いなしの相違を導き出そうとしているからである。この傾向は、例えば、すでに見たブラウンの解釈に顕著である。彼は、実験(1)は算術的であるが、実験(2)は感覚に頼ったため幾何学的であるとして、実験ののち、ソクラテスによって、召使いの子が思いなしをもつに過ぎないとされる根拠は、(2)における感覚の併用であるとした。さらに彼は、(1)の問いの形式が *ti estin* であるのに、(2)の問いの形式が *poion estin* であるということを指摘し、後者は本来のソクラテスの問いかけからみれば劣った形式であると考えているのである。

『メノン』篇においても、*ti* と *poion* という問いでは、ソクラテスは確かに *ti* の問いを優先させている。そして、このことをまた根拠にして、ここにまた *ti / poion* を二分法としてとらえ、前者をウーシアーについての面識による知識、後者を命題による知識ととらえる解釈が成立するのである。この解釈の立場からは、ロビンソンの考えるように、ウーシアーがそもそも言表不可能なものならば、ソクラテスの「何であるか」という問いは事実上「どのようなものであるか」という命題的知識のなかに吸収され、知識の確実性は命題間の演繹的關係によるものとなるだろう。⁽¹⁷⁾

しかし、そのような解釈とはまさしく反対に、『メノン』篇でのプラトンの意図は、思いなしと知識を区別し、その思いなしを用いて知識に接近することにあつたのである。言い換えれば、このことはすなわち、*ti* の問いかけのもつ厳密さを保持しながら、それを実際の探求の場面で生じる *poion* という知識にどのように結びつけるかという問題であった。そのために、プラトンは、まず相互に背馳的な *ti / poion* の二分法を否定するため、探求のパラドクスを導入し、その上で想起説を提示したのである。想起説とは、まだ理論的に整備されていないものの、無知を自覚したのちの対話者に対して、*poion* からの探求方法の厳密性にも保証を与えるものであった。このように考えると、召使いの子の実験の後にかたられる「仮設的方法」は、正しい思いなしから自覚的に出発するために、所有する命題の強固さ(信頼性)を基準にし、具体的な言論においてそれを展開させる方法を素描的に述べたものである。⁽¹⁸⁾従って、ブラウンのように二つの問いの形式を論理的に遮断するのは、プラトンが召使いの子による実験で意図していた内容にむしろ反する解釈であろう。

それでは、プラトンはいったいなぜ、非通約数の証明を実験に用いたのであろうか。ここで召使いの子の実験を再解釈してみたい。まず、実験(1)を通じて、召使いの子は通約数の演算を学ぶが、求めなければならぬ八平方プスの正方形の一辺はこの方法では求められず、アポリアーにおちいる。しかし、このアポリアーによって召使いの子は、通約数が「何であるか」の問いの答えでありえないと知り、まだ知らない非通約数について正しい思いなしを得たことになる。この思いなしは、経験的知識のようにとらえられるもの

ではなく、むしろ「何であるか」と問う召使いの子に対して、その問い方を知らしめる知なのである。この知は探求者の内部で起こっていることであるから、外から見られた様子はアポリアーにおちいっていることに変わりはないだろう。しかし、ソクラテスがいうように、その間にも「無知である事柄についての知が進んでいる」(84B3-4)ということができるのである。アポリアー以後の実験(2)においては、召使いの子はソクラテスの示した新しい図形によって助けられ、正しい答えに到達する。しかし、この(2)の場面においても、召使いの子の所有する思いなしの在り方に変化が生じ、その変化自体が問われているものを暗示していなかったならば、その図形の対角線を求められた答えとして指し示すこともできなかつたろう。「指し示すことができる」ということにおいて、召使いの子のうちにおける「何であるか」の問いは、不十分ながら解決されたのである。

プラトンがここで非通約数の証明を事例として選んだのは二つの点から適切であったといえるであろう。まず、非通約数は、感覚的に測定できる長さではないから、召使いの子が自分自身の知を通じて把握しなければ、「これ」といって指し示しうるものではなかつた。そして、召使いの子にとって非通約数という名前すらも未知なもので、通約数ではないというアポリアーを経てはじめてその内容を知りうるものであった、という二点である。想起説は、探求者の所有する正しい思いなしが、ものごとのウーシアーにふれる端緒であることを語っていた。ソクラテスは、召使いの子が自分の所有する思いなしを手掛かりとしながら想起の過程を終えたことを確認してはじめて、求められた線分の名前、つまり「対角線」という呼び名を教える。ソクラテスにとって重要なのは名前よりもむしろ、召使いの子が経た想起の連鎖なのである。こののち、召使いの子は「一辺二プスの正方形の対角線が八平方プスの面積の正方形の一辺である」という真なる命題を述べることができるかもしれない。しかし、逆にいえば、そう語ることができるということが直ちに知識の所有を裏づける訳ではない。それゆえ、召使いの子は正しい思いなしをもつに過ぎないといわれるのである。

V 正しい思いなしから知識へ導くもの

諸家の実験の解釈が、正しい思いなしを知識へと移行させるものを幾何学に伴う演繹過程と類同化していることは、すでに見てきた通りである。しかし、プラトン自身は、正しい思いなしから知識への移行をどのように説明しているのだろうか。プラトンは、その過程を「根拠の思考」として説明している(98A)。

そこで、思いなしを知識になす「根拠の思考」とは、いったいどのような過程なのだろうか。そのことは、ひとことでいえば、想起の過程にほかならない、とプラトンはいっている。すなわち、プラトンにとっては、まさにそれをつうじなければ、方法的に、或るものについての思いなしと知識の区別を、知識の獲得に連動させることはできないものとして、想起という過程はあるのだ。この意味で、幾何学における演繹過程は、知識の正当

化に関わるひとつの論理であるが、プラトンがわれわれに実験をつうじて示そうと試みているものは、それとは全く異なった「想起の論理」であることがわかる。

想起とは、思いなしと知識をはっきり区別した上で、対話者に内在する正しい思いなしに立脚しながら、「何であるか」の知識を求める方法である。『メノン』篇では、まず、「何であるか」の問いを初期対話篇の形式でたどったのち、その問いかけが結果的に行き詰まらざる得ない過程を描き、探求のパラドクスによって、その原因は対話者のもっている知識と無知識の二分法であることを明確に指摘した。そこでプラトンは、想起説によって、ソクラテスの対話的要請は知識と無知識との間に正しい思いなしの領域を生じさせることを確認し、それによって、「何であるか」の問いが継続される可能性を保全したのである。この思いなしと知識を言論の行使によって結びつける探求方法、すなわち想起は、幾何学的な論証過程に解消されるものではない。なぜならば、演繹過程のアプリオリに依拠する解釈者が想定しているのは、想起とは反対に、そのような「思いなし」のもつ積極的な性格を排除し、知識の成立する領域を一元化することにあるからである。だが、プラトンの意図はその反対なのである。想起は、対話者が言論によって表明する「真」から、確実さという点でより強固な他のものに思いを凝らすことから始まる。この論理は、言葉をもちいて探求することのできるすべての領域を包括する論理であり、プラトンの問答法は、まさにこのことを核心としているのである。

プラトンが『国家』篇で数学に与えた極めて高い位置づけは、問答法の論理と、幾何学的論証の論理を類同化しやすい傾向を与えたことは否めないであろう。しかし、われわれは、問答法の論理をそれ自身として、すなわち、その方法のみがアイデア論を不可欠のものとして要請せざるを得ないかたちで、提示しなければならないのである。

補注1 Priority of Definition (PD)について

PDについての私の現在の考えを以下にまとめて述べておきたい。まず、PDは、Vlastosの主張するように『メノン』篇以降数学の特別の影響下に導入されたものではなく(Vlastos 1991)、初期対話篇においてソクラテスが主張している定義の優先に同一である(この点はBenson, Nehamasの解釈を支持)。しかし、NehamasやFineらのように、PDそれ自体の内容を、探求者はあらかじめ探求の対象の同定ができ、それについての多くの正しい思いなしを所有していることを理由に「弱く」解釈することはできないと思われる(Irwin, Bedu-Addoもこの弱い解釈をとる。なおNehamasに対するBensonの批判を参照: Benson p.148-149)。初期対話篇において、ソクラテスはPDを対話者に対して規範的に使用する(ソクラテスはしばしば「エイダス = 何であるかの答えを述べよ」という要求に反したとって対話者の答えを退ける)。このような規範的な使用は、PDが知識の完全な優先を含意したものであると対話者自身に理解されていなければ不可能である。従って、PDは「対話者はtiの問いに自分自身が真とする言論で応じなければな

らない」という対話的要請としては「強く」解釈される。『メノン』篇でもこのPDの機能は変わらないが、ソクラテスがPDの比喩として出した事例(71B3-7)は多くの誤解を招いている。すなわち、PDが「強く」解釈されるためには、PDによってプラトンの想定している知識はこの箇所で述べられている知の形態、つまり「面識による知」でなければならないという誤解である(この点については Irwin の批判が妥当: Irwin p. 315)。ここから、PDはそもそも認識論的に自己矛盾的な内容をもっており、それが探求のパラドクスによって指摘されたのだ、という解釈が成立する。この解釈をとるものは、パラドクスの関わるのは、面識による知を想定しうるある目的に向かってなされる探求であると考え、その対象を同定するための知識(正しい思いなし)を供給するのが想起説の目的であると結論するか(White. なお Irwin は、「対象を同定する」ためではないが、想起説は正しい思いなしを供給するものとみる)、経験的な知識に対比された意味でのアプリアリな知識をパラドクスのあてはまらない知とし、それが想起説で与えられているとするか(アプリアリ主義者)のいずれかである(それに対し Morgan は想起説が対象の同定に関わる認識論的パラドクスを解消するものではなく、真理の問題に関わることを正しく指摘した)。私は、ソクラテスが面識による知の事例によってPDを説明したのは、メノンを実際に見知っているということが、そのほかのメノンについての知に「優先する」ことが誰にとってもまったく自明なことであったからに過ぎないと考える。確かに、プラトンはアイデアとの遭遇を彼の想起説のなかで語っている。しかし、そのことを理由にPDを面識による知を要求するテーゼとして限定することはできない(これについては補注2)。PDは面識による知に限定されないが、対話的要請として「強く」解釈されるべきである。それでは、その場合、パラドクスはどのように解釈されるべきか。

PDの意味を弱め、それによってパラドクスを回避するという方向(Nehamas, Fine)は、パラドクスそのものも弱めるばかりでなく、プラトンが想起説を導入した動機を十分に説明しえない。パラドクスはほかならぬPDの強い機能から生じるのである。まず、われわれは、アポリアー以前の対話者のありかたと、それ以後の対話者のありかたを区別しなければならない。『メノン』篇において、アポリアーにおちいる以前のメノンは、他の定義対話篇においてソクラテスの反駁を受ける対話者と同様、徳について $\tau\iota$ の問いに答えよというソクラテスの要求に応じて、徳について知識を持つものの立場から、彼の真と考える命題を述べる。しかし、それがPDの要請をみだすものではないことを根拠にしてソクラテスはそれらの命題を退けてゆく。そして、メノンは自分の無知を認めざるを得なくなるが、メノンは「 $\tau\iota$ の問いに自分自身が真と考える言論で応じる」というPDの要請を逆手にとり、自分自身の思いなすことが真であるという争論術の論理を反語のかたちでパラドクスにおいて述べたのである(拙論参照)。要するにパラドクスはPDの強い解釈から必然的に生じる詭弁なのである。プラトンは、これに対して無知を認めた以降もPDの要請に従い、自分自身の真と考える言論によって $\tau\iota$ の問いに答えなければならないことを示さなければならなかった。「無知の知」に対話者が至ったのちは、対話者は自分の真

と考える思いなしを退けられても、それを知識であるとして固執することはできない。それでもさらに、一方において自分の無知を認めながらも、依然としてPDの規範的な役割が継続されるためには、対話者のうちに真なる思いなしが内在するという想起説の導入が不可欠であった。想起説は、PDの強い要請を回避するバイパスではなく、その要請の必然的な帰結なのである。

補注2 アイデアとの遭遇について

想起説は前世におけるアイデアとの遭遇を語るものであり、それ自体を根拠にしてプラトンは現世における知識の想起を正当化しているとする解釈に対して、私はつぎのように答えたい。確かに現世での知識、あるいは正しい思いなしは、前世でのアイデアとの遭遇によるものとプラトンは語っている。しかし、その真意はいかなるものか。まず、この解釈がしばしば、PDの要求を「面識による知」を求めよという要求とみなす誤解に基づいている点を指摘したい。もしそれを根拠として「遭遇」を不可欠と見なすのであれば、私は補注1に述べた理由によってそれに全面的に賛同することはできない。想起説は「遭遇」を知識の正当化の根拠とするためだけに提出されたとすれば、Whiteが指摘しているように、現世での想起の正しさについて無限後退におちいる可能性をまぬがれない。そして、このような無限後退を避けるために、探求者はその対象について潜在的な知識を所有している、だから正しい思いなし、さらに知識すら自ら主張できるのだ、と断定すれば、それは争論術の論理と同じで、自ら全知を僭称することにはほかならないだろう。プラトンが、この可能性に対し無防備なまま想起説を案出したと考えるのは、彼に対して好意的ではない。

この「遭遇」を重視する解釈の問題点は、前世での知識の獲得と現世でのその想起を、あまりに同一の直線上のふたつの出来事と類似的に捉えすぎているということである。対話篇のなかでプラトンが想起説を導入したのは、現世で「無知」の事柄にどのように接近できるかという問題に対してであった。現世の探求と「遭遇」による知識は、現世における「知らない」という真実においては非連続であるが、想起という方法によってのみ、その真実を損なうことなく連続的になる。プラトンの想起説はこの「非連続の連続」を語っており、潜在する知識による単なる正当化をめざすものではない。補注1で述べたように、想起説は、なによりもPDによる対話的要請がアポリアー以後も存続していることを示すために導入されたのであり、まさしく現世において探求している対話者がもつ内在的視点にその動機をもつのである。

引用文献

Bedu-Addo, J. D., "Sense Experience and Recollection in Plato's Meno," *American Journal of Philology* 104 (1983) pp. 228-248.

- Benson, H. H. , “Meno, the Slave Boy, and the Elenchos,” *Phronesis* 35 (1990), pp.128–158.
- Bluck, R. S. , *Plato's Meno* , Cambridge UP, 1961.
- Bostock, D. , *Plato's Phaedo*, Oxford UP, 1986.
- Brown, M. S. , “Plato Disapproves of the Slave Boy's Answer,” *Review of Metaphysics* 21 (1967–8), pp. 57–93.
- Cherniss, H. , “Plato as Mathematician,” in his *Selected Papers*, ed. L. Taran, Leiden, 1977, pp. 222–252.
- Fine, G. , “Inquiry in the Meno,” in *The Cambridge Companion to Plato*, Cambridge UP, 1992, pp. 200–226.
- Irwin, T. , *Plato's Moral Theory*, Oxford Clarendon Press, 1977.
- Morgan, M. L. , “How Does Plato Solve the Paradox of Inquiry in the Meno,” in *Essays in Ancient Greek Philosophy* 3, ed. P. Anton & Preus, SUNY Press, Albany, 1989, pp.160–181.
- Moravcsik, J. , “Learning as Recollection,” in *Plato I* , ed. G. Vlastos, New York, 1971, pp. 53–61.
- Nehamas, A. , “Meno's Paradox and Socrates as a Teacher,” *Oxford Studies in Ancient Philosophy* (1986), pp. 275–316.
- Robinson, R. , *Plato's Earlier Dialectic*, 2nd ed. , Oxford UP, 1953.
- Ross, W. D. , *Plato's Theory of Ideas*, Oxford UP, 1951.
- Seeskin, K. , “Meno 86C–89A: A Mathematical Image of Philosophic Inquiry,” in *Plato, Time and Education*, ed. B. P. Hendley, SUNY Press, Albany (1987), pp. 25–41.
- Seeskin, K. , “Vlastos on Elenchus and Mathematics,” *Ancient Philosophy* 8 (1993), pp. 37–53.
- Vlastos, G. , “Anamnesis in the Meno,” *Dialogue* 4 (1965), pp. 143–167.
- Vlastos, G. , *Socrates, Ironist and Moral Philosopher*, Ithaca: Cornell UP, 1991.
- Vlastos, G. , *Socratic Studies*, ed. M. Burnyeat, Cambridge UP, 1994.
- White, N. P. , *Plato on Knowledge and Reality*, Indianapolis: Hackett, 1976.

加藤信朗『初期プラトン哲学』、東京大学出版会、1988年。

神崎繁「知と不知の間——『メノン』篇における探求のパラドクス」
『哲学雑誌』767号、1980年、127–145頁。

上田徹「パラドクスの論理——『メノン』篇における知識の問題」
『哲学・思想論叢』11号、筑波大学哲学・思想学会編、
1993年、15–26頁。

【注】

- (1) White がこの「探求」をもっともよく定式化している。この定式化は、「何であるか」の問いに対する答えは「面識による知」によって獲得されるしかないという強い「定義の優先」の解釈に基づいている。White 自身は想起を「探求一般の対象の同定」に関わるものとみて、想起による知をアプリアリな命題に限定してはいない(White p59)。しかし、このような思考法からアプリアリな知識に想起を限定する解釈が有力な根拠を見出していることは、例えば Moravcsik にもっとも顕著である。実験をアプリアリな知識の提示、探求の対象の同定に関わるものとする解釈は、定義の優先の解釈と連動している。この点については補注1を参照してもらいたい(なお拙論および Irwin p.315 参照)。
- (2) Bostock p.110 -115. しかし Bostock はプラトンが哲学的な知識のモデルとしてアプリアリな知識を提示したことは有効であったと見ている。
- (3) Brown p.77, Bedu -Addo p.244 -248, Benson p.137 参照。Bedu -Addo は、プラトンが幾何学的論証によって解くことができない非同約数を問題として選択し、実験(2)で図形を用いて正答に到達したのは、彼が既に『メノン』篇からアイデアとの遭遇による知識の獲得を想定していたためであるという。しかし、Bedu -Addo の解釈は『パイドン』篇からの読み込みが過ぎるように思われる。彼の論点は感覚もまたアイデア想起の端緒になるということである。
- (4) Bluck p.12, Nehamas p.18-20 参照。Bluck はソクラテスの召使いの子への質問は「誘導尋問」(leading question)であることを認めているが、質問への答えは自分自身の考えを述べているということ、および答えに伴う理解(inner conviction)があるゆえ、ソフィストとソクラテスの教示は異なるという。問題となるのは 82C7-8, D1-4, 83C8-D1, D4-5 の箇所についてであるが、Nehamas は召使いの子の知の状態に言及する Bluck を批判し、重要なのは対話者が自分の思いなしに従って答えを述べ(だがこの点は Bluck も言及している)、思いなしの真偽をテストすることであるという。このテストは Nehamas の場合、論証形式の体系性によるものに帰着する。この Nehamas の主張は Vlastos1994 に酷似している(特に p.20)。Nehamas は対話的解釈を強調しているが、その解釈には賛同できない点が多く含まれている(注(16)参照)。しかし Bluck の解釈は全体的に穏当であり、こんにちでもその重要性は失われていない。
- (5) ラリサへの道の比喩の解釈については、加藤(p.200)に適切な指摘がある。また Bluck は、正しい思いなし/知識の区別を感覚的個物/アイデアという対象の区別によって捉える Gould の解釈の批判にこの例を用い、もしそのような区別がこの比喩にあるのならば、この比喩は無意味となると述べている(p.35)。Bluck が強調するのは、想起による対話者のうちの概念の形成を二分法にとらわれないでみることである。この視点は、彼の実験の解釈にも反映しており、彼は、ソクラテスのそのつどの問いかけにおける召使いの子の「想起」を繰り返し強調している。従って、彼が想起される知識はアプリアリな知識であると

いう場合も、それはほぼ prenatal ということの意味しており、それゆえ加藤 (p.270) のように Bluck を Vlastos と等し並みのアポリアー主義者として扱うことに私は反対である。

(6) Ross p.18.

(7) Brownの解釈は、tiの問いが実験のアポリアー以前に対応し、poionの問いが『メノン』篇の仮設法に対応するというものである。Bedu-Addoは仮設法はtiの問いを継続させる内容をもつと考えBrownを批判するが、Seeskin1987は仮設法の暫定的な性格はtiの問いと等価ではないという理由からBrownを支持し、Bedu-Addoを批判した。また、Bensonは仮設法は論駁法と異なったものではあるが、アポリアーを含む第二段階に部分的に対応するとし、Brownのti/poionによる実験の区別を退けている。

(8) *Meno* 85C10-D1 参照。このソクラテスの言葉はふつう思いなしと知識の獲得の両者が方法的に同一であることを示していると解される。

(9) プラトンと歴史的テアイテスと無理数論の関係については、Cherniss p. 237ff. 参照。

(10) Vlastos 1965 p. 156. Vlastos に対する最近の批判は Seeskin 1993.

(11) Vlastos 1965 p. 159 参照。Vlastos は「自らの内から知識を得ること」が想起であるというプラトンの言葉の意味は、自らの内にある真なる命題の論理的連関を認知して、それを公理体系につくりあげてを意味すると考えている。しかし、プラトンが「想起」によって、真なる思いなしから知識への移行を説明した背景には、このような「真なる思いなしの蓄積の増大」以上の意味があることにも同時に気づいている。

(12) Vlastos は算術的問答はその論理性のゆえにアポリアーに陥らないという (p. 146n. 5)。Cf. *op. cit.* p. 157n.28.

(13) Moravcsik への有効な批判は加藤 p. 270, Morgan p. 172-173 に見出せる。

(14) 拙論参照。

(15) 神崎、加藤にみられる「無知の知」の積極性の対話者への内在に立つ解釈に対しては、全く同感であるが、それがソクラテスの対話的要請からの必然的帰結であることを示さなければ『メノン』篇全体の問題連関を見通すことはできない。欧米の研究者、例えば Benson はアポリアーの段階を重要視しているが、そのはたらきは誤った思いなしの除去に過ぎず、消極的なものと見なしている。また他の研究者は積極的にみなすにせよ、それを誤った思いなしの論証と解する。ここに混乱がある。

(16) Nehamas はパラドクスを解消するのは問いと答えによる探求の可能性であると正しく指摘しているが、知識モデルは Vlastos に酷似している。そのため、想起を正しい思いなしのみを体系化する段階に関わると考え、自分の思いなしが偽であると悟ることは本来の想起ではないとし、実験の大部分が想起を含まないと主張している。ここにも二分法的発想がある。

(17) Robinson の解釈が Vlastos の知識モデルの着想に与えた影響は大きい。

(18) 私の仮設法の解釈はここでは Bedu-Addo に好意的である。

(19) 例えば、Cornford は『国家』篇第七巻の解釈において問答法と数学の論証を区別する

が、プロクロスの影響のもと数学的論証に問答法と同列の位置づけを与えている。それに対して Seeskin 1987 は懐疑的である。

(うえだ・とおる 筑波大学大学院哲学・思想研究科在学)